

野生鳥獣保護管理技術者育成研修(カワウ)講義資料

この講義資料は、下記の研修のために使用されたものです。

そのため、情報が古い場合があります。

また、Web での掲載のために一部修正や削除、構成の変更をしているものがあります。

2011 年度 野生鳥獣保護管理技術者育成研修(カワウ)概要

対 象: 都道府県の鳥獣行政担当者、水産行政担当者、内水面漁業関係者、その他
カワウの保護管理、調査、被害防除に関わる者

開 催 日: 2012 年 2 月 16 日(木)～2 月 17 日(金) 1 泊 2 日

場 所: 行徳文化ホール(千葉県市川市)

講師と科目: 加藤ななえ(カワウの生態)

: 千葉康人(特定鳥獣保護管理計画とカワウの広域管理について)

: 高木憲太郎(カワウの有害鳥獣捕獲と狩猟)

: 坪井潤一(繁殖抑制による個体数管理)

: 須藤明子(Sharpshooting による個体数調整～滋賀県のカワウ管理～)

: 羽山伸一(野生鳥獣における個体数調整の課題と対策の進め方)

: 須藤明子・坪井潤一(個体数調整の準備と計画)

野 外 実 習: 行徳鳥獣保護区(千葉県)

: カワウの繁殖と営巣台、定着防止区域の視察

現地説明者: NPO 法人バードリサーチ

: NPO 法人行徳野鳥観察舎友の会

野生鳥獣における個体数調整の課題と対策のすすめ方

羽山伸一（日本獣医生命科学大学・獣医学部）

個体数調整の課題

動物種の生態的特性にもよるが、基本的に野生鳥獣の個体数が増加することで被害問題は広域化かつ深刻化してゆく。したがって、個体数調整は被害問題の対策では重要な手法となっている。しかし、積極的に個体数調整を行なっているにも関わらず、問題が解決しない事例が多い。以下にその主な原因と課題をあげる。

① 計画性の欠如

無計画。現状把握やモニタリングが不十分。目標が設定されていない。エビデンスに基づかない捕獲計画。他の対策手法が欠如。

② 実効力の欠如

捕獲能力や体制がない。必要な予算措置がない。科学的評価ができない。

③ 不適切な手法

捕獲の場所、方法、個体の選定（無差別）などが不適切（むやみな捕獲）。他の対策手法とのミスマッチ。生息環境管理の欠如。

対策のすすめ方

上記の課題に対応した対策のすすめ方は以下のとおりである。

- ① 現状の把握（個体数はわからない！）
- ② 対策上の課題抽出と優先順位付け（3スケールですべての課題を洗い出す）
- ③ 課題ごとの達成目標を設定（2～3年以内に達成すべき目標）
- ④ 目標を達成させるための手法と実行体制の検討
- ⑤ 目標達成の評価方法（効果検証）を設定
- ⑥ 課題ごとの対策予算の積算と実現可能性の評価
- ⑦ 上記計画のモニタリングと計画見直し（毎年やる！）

課題の解決に向けて

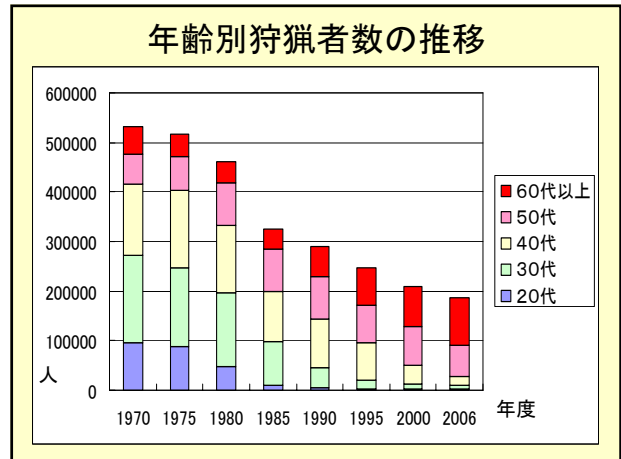
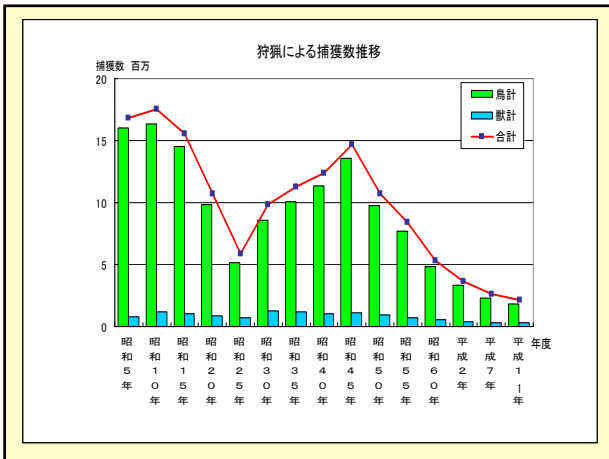
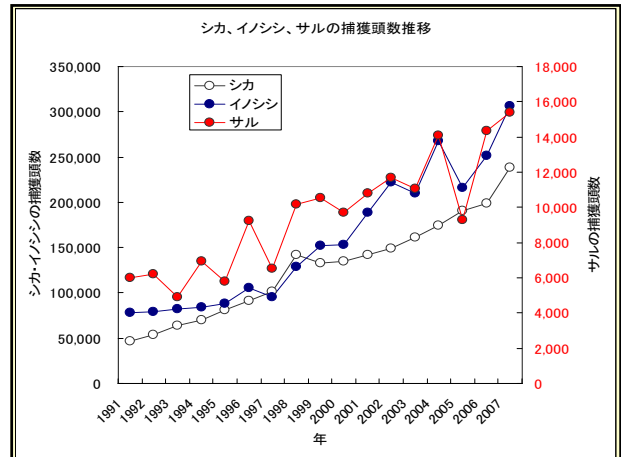
野生動物と人間とのかかわりは未来永劫続くものであり、防災や医療と同じく危機管理として社会システムにしなければ問題の解決はできない。もはや、これは「被害対策」の範疇を超える。ワイルドライフマネジメントが必要な理由はここにある。

このシステムを支える技術者の育成と適正な配置こそが、いま最も優先されるべき政策であり、将来的な費用対効果を向上させる近道だ。

野生鳥獣における個体数調整の 課題と対策のすすめ方

羽山伸一

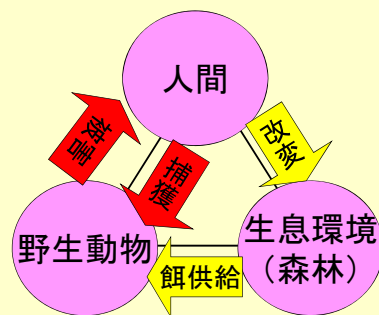
日本獣医生命科学大学・獣医学部・野生動物学教室



野生動物問題の多様化・深刻化

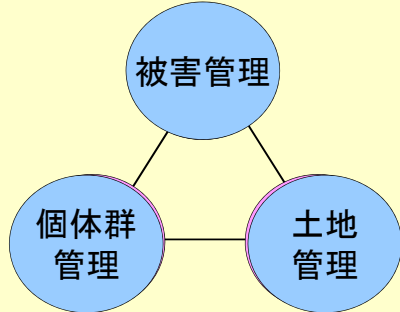
- ・農林水産業被害による地域崩壊
- ・里地里山に生息域が定着(クマ)
- ・都市地域へ被害が拡大
- ・生態系への影響が顕在化(シカ)
- ・外来動物の分布拡大
- ・新興感染症の侵入と蔓延

野生動物管理は社会的コスト
防炎・医療などと同じ

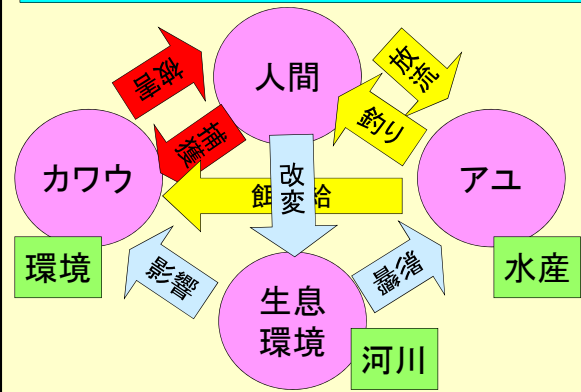


ワイルドライフマネジメントとは何か

これら3つの関係を適正に調整すること



人・カワウ・アユのマネジメント



野生動物対策の手法

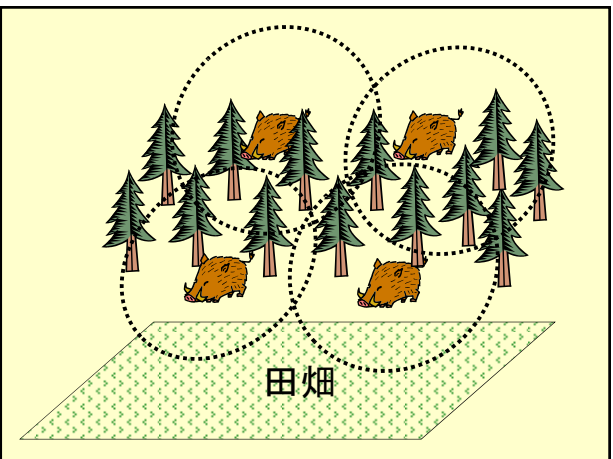
- 個体群管理 捕獲
- 生息地管理 餌・水・隠れ処
- 被害管理 行動制御
 - 物理的制御(ネット、電気柵)
 - 心理的制御(追い払い、イヌ、緩衝帯)

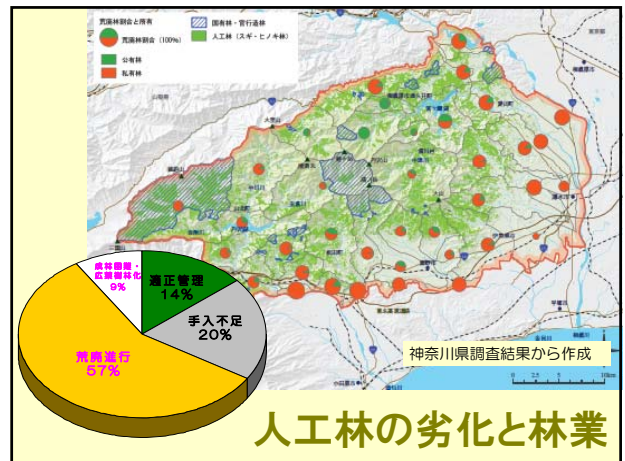
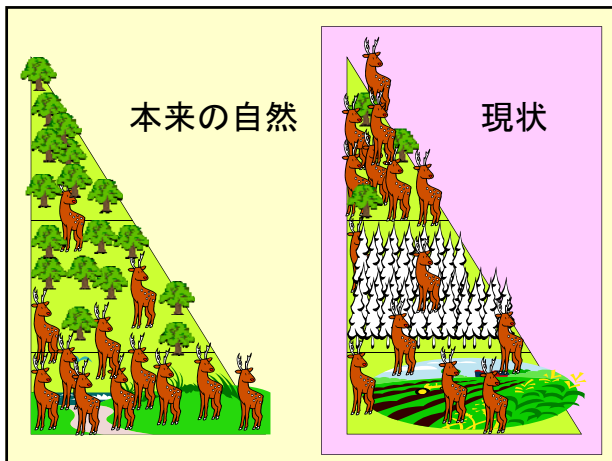
農林水産省検討会報告書(2005)

- 科学的管理 ⇒データ不足、検証不能な対策
- ワイルドライフマネジメントの導入
- 広域管理 ⇒管理者不在
- 県域をこえた連携と協働
- 管理のための人材育成 ⇒技術者不足
- 技術指導者と地域の指導者が必要

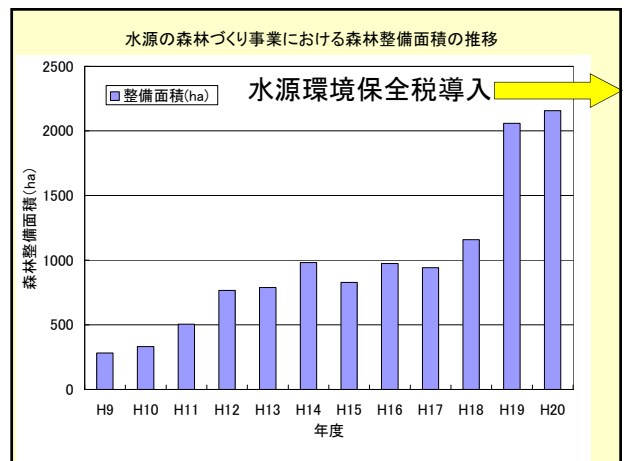
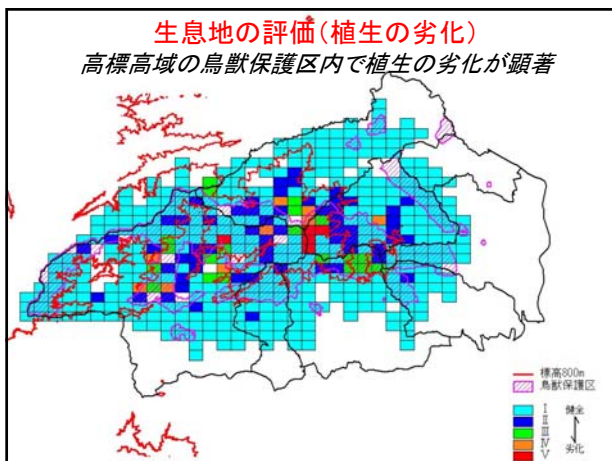
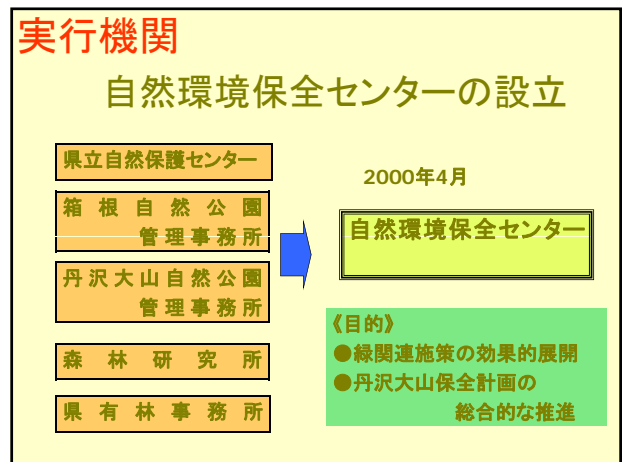
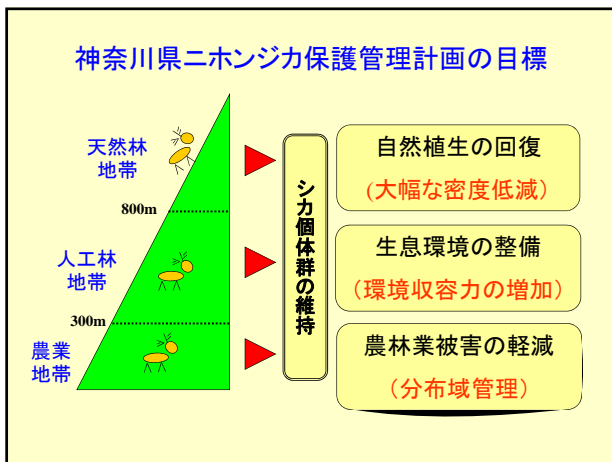
説明責任を果たせる対策か？

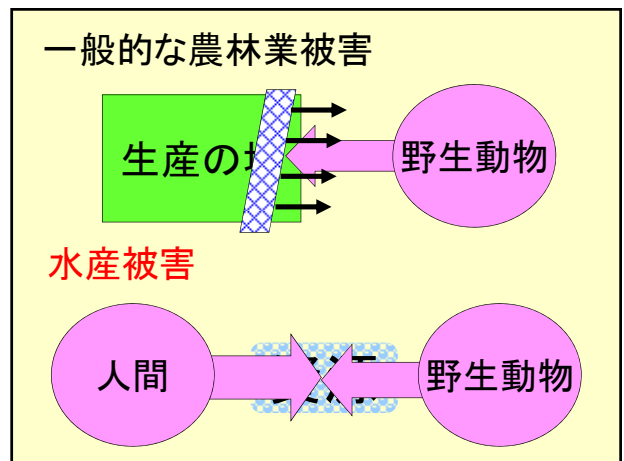
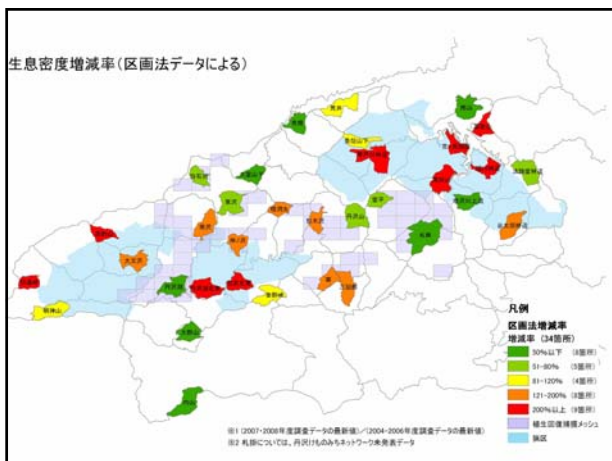
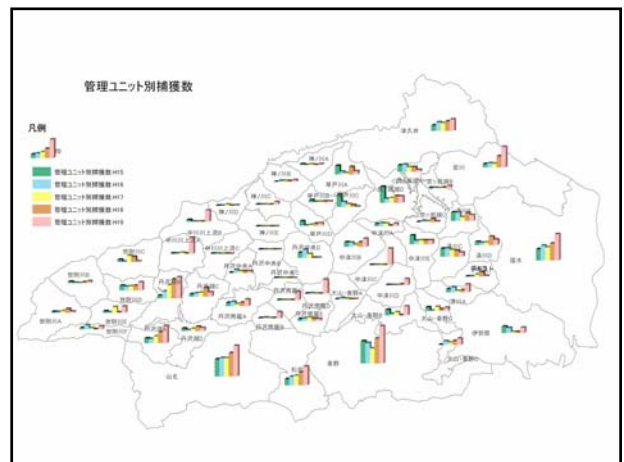
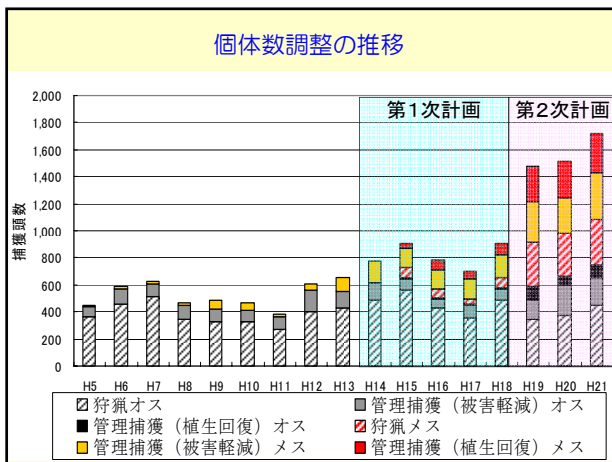
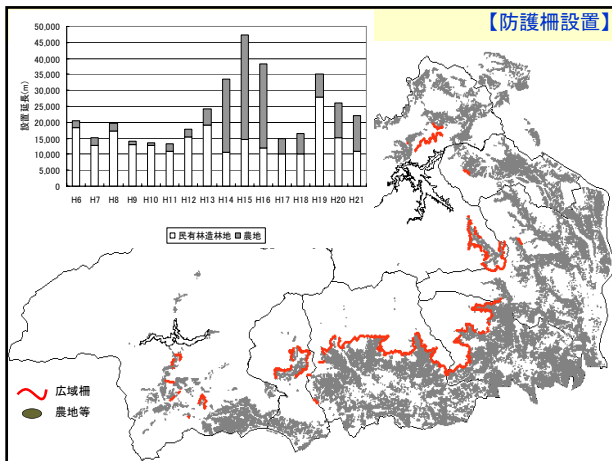
- 捕獲
 - ・捕獲場所、性年齢などのデータ欠如
 - ・捕獲計画自体に科学性が欠如
- 施設整備
 - ・動物の行動特性を無視した構造や設置場所
 - ・集落対策重視に起因する動物分布の拡大
- 人材育成
 - ・農家も県職員も区別しない研修

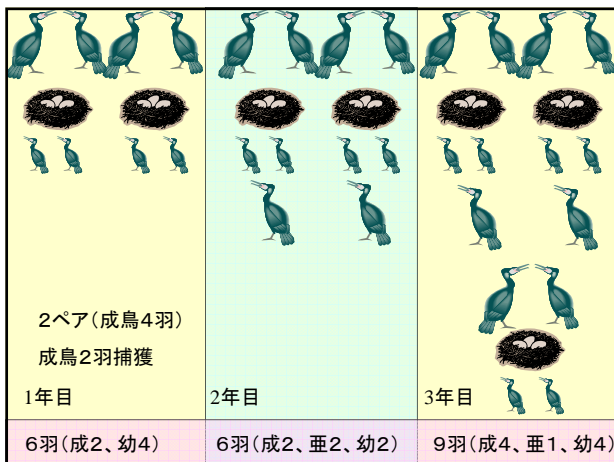
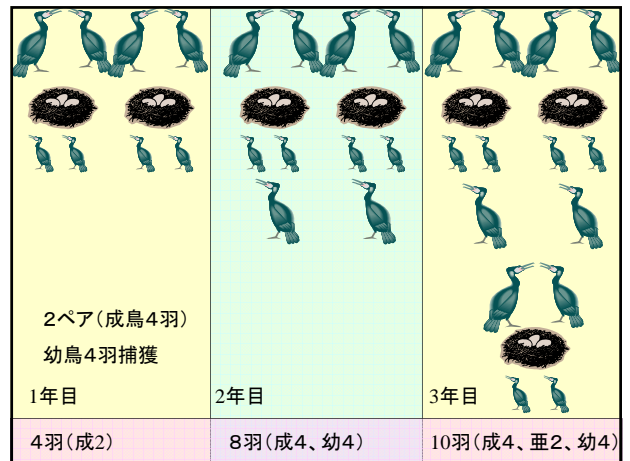
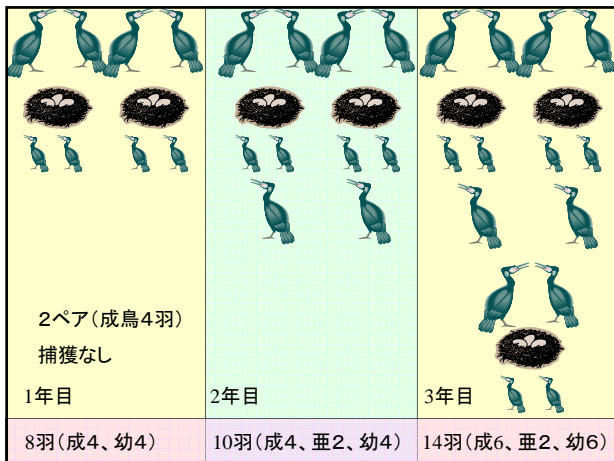




人工林の劣化と林業

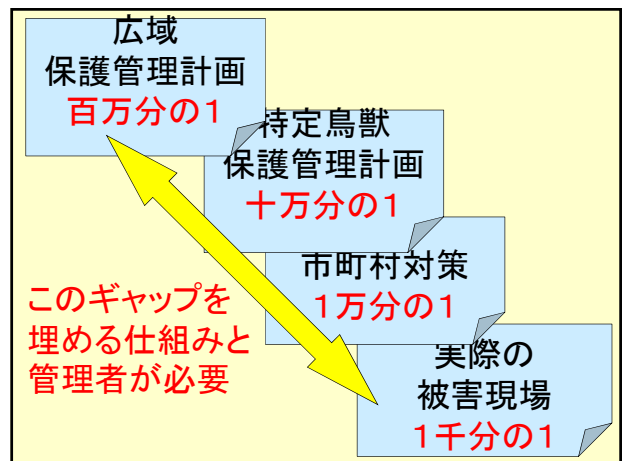
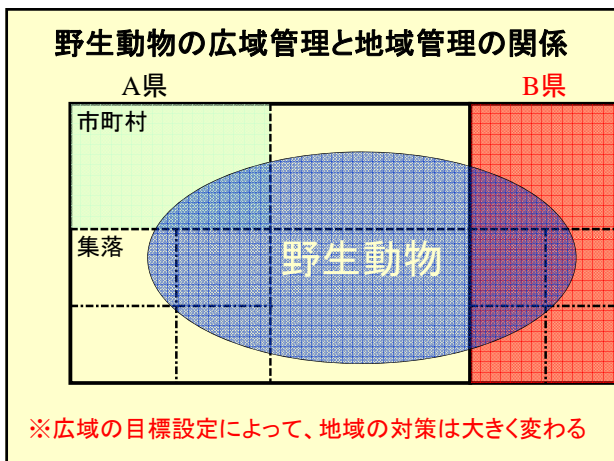






選択的捕獲の効果

捕獲の内訳 (1年目のみ)	0年目	1年目	2年目	3年目	3年間の 増加率 (%)
捕獲なし	4	8	10	14	350
幼鳥4羽	4	4	8	10	250
成鳥2羽	4	6	6	9	225



スタート時点での対策のポイント

個体数はわからない

概数でよい

捕獲数は役に立たない

捕獲地点と性年齢構成に意味がある

被害の定量化は不可能

動物の出没を定量化する

対策の効果は地図上で検証

対策による分布や被害の拡大を防ぐ

カワウ・マネジメントに当面必要な技術開発

個体群管理技術

繁殖抑制技術の開発(コロニー管理)

内水面魚類管理技術

被害回避放流技術の開発

河川環境管理技術

被害回避につながる河川構造の開発

